

H28海外臨床実習

渡航先	サラワク大学
国・地域	マレーシア

番号	報告者	渡航先機関での 受入期間
1	I. T	H29/1/9-H29/2/3
2	M. K	H29/1/9-H29/2/3
3	N. N	H29/2/6-H29/3/3
4	M. N	H29/1/9-H29/2/3

平成 28 年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

医学部医学科 5 年
I. T

【概要】

平成 29 年 1 月 9 日から 1 月 27 日の 3 週間、マレーシア、サラワク州クチンにある Universiti Malaysia Sarawak (UNIMAS) の公衆衛生学にて実習を行った。海外実習コーディネーターである Dr. Tang 及び、公衆衛生学の Dr. Razitasham の懇意な指導や充実した実習計画により大変有意義な実習をすることができた。

【目的】

- ・サラワク州の医療制度を学ぶ。
- ・感染症の予防・管理、並びにプライマリーケアを如何に施行しているのかを学ぶ。

【実習スケジュール】

日付	活動	内容・目的
1/9(月)	Orientation at FPSK	3 週間の実習の方針を説明をした。
1/10(火)		
1/11(水)	Urban Health Clinic Petra Jaya Family Health Unit	家庭医のオフィスが併設され比較適設備が整う都市型の公立診療所で如何に医療がされているのか見学した。
1/12(木)	rural health clinic	都市型に対し、医師が一人しかいない地方型の公立診療所を見学した。
1/13(金)	TB ATAS clinic	結核診療所で結核患者を初診から治療後にわたり如何に管理しているか見学した。
1/16(月)	Biawak CIQ	インドネシアとの国境にある検疫所で感染症をどのように拾い上げているのかを見学した。
1/17(火)	Sarawak Health Office Divisional Health Office Kuching	地方型の診療所を 3 軒見学した。
1/18(水)	DHO Kuching	クチンにある保健衛生局を訪問し、サラワク州の州都クチンの公衆衛生を如何に管理しているかの講義を受け、貿易港に
1/19(木)		
1/20(金)		

		ある輸入品や輸入者の検疫を行うオフィスを見学した。
1/23(月)	District Hospital Serian	地方都市 Serian にある公立病院にて現地学生とともに施設紹介、Serian における公衆衛生の講義に参加した。
1/24(火)	CMPH lectures	現地学生とともにキャンパス内で講義に参加した。 内容は論文の書き方や作り方、汚染が人にもたらす影響についての講義であり、すでに3回生で講義を受けた内容とそれほど大差なかったので目新しさはなかった。
1/25(水)		
1/26(木)		
1/27(金)		

【成果】

今回大きく分けて三つのことを経験できた。

一つ目は感染症についてである。大学の講義で感染症について学び、スライドを用いた実習はしたので、感染症について知っているつもりで今回の実習に臨んだ。しかし、机上のものと実際に感染症予防・管理をしている場を見ることは大きくかけ離れていた。検疫や蚊へのフォギングなどの予防から始まり、診療所での診察・治療、罹患患者のモニタリングなどの管理をするためには、中枢の人間も現場の人間もお互いにコミュニケーションをかわしつつ、綿密に進めていかならず、その姿を直に見られたことは非常に貴重な経験であった。

二つ目はマレーシア、特にサラワク州の医療制度についてである。マレーシアの保険制度や医師の数、医学教育は日本のそれとは大きく異なっていた。日本と比べた利点や欠点を自分の中で考えることができ、今後日本でそれを提案できる機会があれば是非してみたい。さらに課題を見つけるために海外実習・留学に再び行きたいと思うようになった。

三つ目は現地学生との交流である。現地学生との交流を通じ、英語を鍛錬できるのみならず、マレーシア文化や宗教を学ぶこともでき、理解を深めることができた。

【今後の抱負】

4月から臨床実習をしてきたところで今回公衆衛生実習を行えたことは非常に貴重な経験であった。臨床医学を俯瞰してみることができ立場で再度実習できたことによって、マレーシアの医療の全体像をつかめるとともに日本との違いもより鮮明に浮き上がり、こういったことは海外実習でしか得ることのできないもので、今後医師になっていくうえでこの経験のおかげで、より広い視野を持てるであろうと期待している。

また、マレーシアの学生が学ぶ姿を見て、自分の勉強不足さを再認識でき、サラワク大学のよりずっと臨床に根ざした学習方法はとても印象深いものであり、今後の臨床実習で

は自ら積極的にスタッフの一員という認識を持ち、臨んでいこうと思えた。

【終わりに】

今回の海外実習に関して、ご支援いただいた岸本忠三先生、医学科教育センターの和佐勝史先生、西川亜希様、学生支援係の柴田様、UNIMAS の Dr.Tang、Dr.Razitasham、その他お世話になったすべての先生に感謝申し上げます。ありがとうございました。また、UNIMAS の学生の手厚い支援なしにはこの実習が成り立たなかったことも付け加えておきます。

平成 28 年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

医学部医学科 5 年

M. K

・海外活動中の日ごとスケジュール一覧

- 1/9-10 オリエンテーション
- 1/11 プトラジャヤクリニック訪問、見学
- 1/12 シンガイクリニック訪問、見学
- 1/13 結核クリニック訪問、見学
- 1/16 インドネシア国境検疫訪問、見学
- 1/17 サラワク州ヘルスオフィス訪問、見学
- 1/18-20 ディストリクトヘルスオフィスの活動に同行
- 1/23 セルリアン病院訪問、見学
- 1/24-27 現地学生と共に授業に参加
- 1/30-2/3 春節のため授業はなく、レポート作成

・活動の目的

マレーシアにおける公衆衛生学の現在を、現地の病院、クリニック、ヘルスオフィス等を訪ねることを通じて体験する。

・活動の内容

サラワク大学の公衆衛生学教室で実習を行った。マレーシアの都市部及び農村部のクリニックに直接行き、現地の医師、その他コメディカルの方々から話を伺った。また、マレーシアとインドネシアの国境や輸入物を扱う港へも行き、検疫の現場を見学した。その他、現地の学生とともに公衆衛生の講義の受講も行った。

・活動の成果

マレーシアで深刻な問題となっているデング熱、マラリア、日本脳炎などの病気の知識を得ることができ、加えてそれを予防するために国内で行われている予防施策について学習した。また、農村部での医師不足、都市部での医師過剰など日本と同様の問題を抱えるマレーシア医療についての理解が深まり、それらに対する国の取り組みについても学ぶことができた。

・海外での経験について

過去に訪れた国とマレーシアの最大の違いはイスラム系の人々の存在であった。なにか怪しい印象のあったイスラム系の人々だったが共に授業を受け、放課後はバレーボールをし、夕食を食べに行くうちにそのような考えは完全に払拭された。また、多民族国家であるマレ

ーシアでの、異なる民族同士の関わり合いを間近に感じられたのはとても貴重な体験であった。

・今後の抱負

日本国内とは異なる場所で医療現場、医療システムをみる機会を得られたことは将来に大きな意味を持つと思う。一つは日本の医療とマレーシアの医療を比較し、例えば医療保険システムのような日本の問題点を意識できたことで、このような制度自体を変えることの重要性を実感できたことである。これにより、行政ではたらくことへの興味が深くなった。一つはイスラム文化を経験できたことである。これまで会ったこともないのにイスラム系の人々に何か怪しいイメージを持っていたが、それが全くの見当違いだったことは私にとって大きなショックだった。これからも最初からバイアスを持たず、自分の目で積極的に知らない世界に挑戦していきたいと強く感じた。

・謝辞

今回岸本国際交流奨学金に採用していただき、誠にありがとうございます。この奨学金をいただけたおかげで海外での医学実習に参加する機会を得られ、普段接する人々とは異なる見地をもった先生方や学生と触れ合うことができ、大きな刺激を受けました。今後の人生でも今回経験した貴重な経験を活かして参りたいと思います。

平成 29 年度 岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

渡航先：協定校 サラワク大学（マレーシア）

医学科 5 年 N. N

■ スケジュール一覧表

2月6日	月	イントロダクション
2月7日	火	ミニ・プロジェクトの説明と準備
2月8日	水	結核の診療所見学、講義
2月9日	木	郊外の診療所見学、講義
2月10日	金	寄生虫学実習
2月13日	月	講義
2月14日	火	パイロット・スタディ
2月15日	水	ミニ・プロジェクト実習
2月16日	木	プレゼンテーション発表
2月17日	金	マレーシアとインドネシア国境付近の施設訪問
2月20日	月	村への訪問
2月21日	火	District Health Office の見学
2月22日	水	クリニックの見学、村への訪問
2月23日	木	クリニックの見学、村への訪問
2月24日	金	クリニックの見学
2月26日	日	村への訪問
2月27日	月	クリニックの見学
2月28日	火	Fogging（成虫の蚊に対する殺虫剤の散布）の見学

■ 目的

マレーシアの地域医療・公衆衛生の授業に参加して、予防医療や健康問題への取り組みを自国と比較しつつ学ぶ。また、海外の学生と交流することで実践的な医療英語や日常会話に触れる。

■ 内容

今回留学生の私に特別に設けられた課題として、ミニ・プロジェクトに取り組みさせてもらった。その内容は、講義棟と学生寮のある Lot 77 と呼ばれる敷地内における蚊の種類の特定に関する調査であった。具体的には Ovitrap と呼ばれる装置を設置して、それから 1 週間後に幼虫を顕微鏡下で観察するとともに、その地域に生息する蚊の種類を判別した。このフィールドワークを通して、蚊の成長過程や、種ごとに異なる特徴を学ぶことができた。最終的には、結果をレポートにまとめ提出したのだが、先生方からもフィードバックを頂くことができ、英語の面でも勉強になった。

また、担当の先生方が特別にプログラムを組んでくださったおかげで、様々なクリニックの見学をすることができた。特に印象的に残っているのは、インドネシアとの国境付近にある施設の訪問である。島国で海に囲まれている日本とは異なり、マレーシアとインドネシアは陸続きになっており、人々の交流が盛んである。そのため、就労や学業目的とした人々に加え、マレーシアでの医療を受けに来る人々も少なくない。その施設では越境する人々の感染症スクリーニングも行っており、国内への感染症持ち込みを防いでいる。

今回参加させてもらった地域医療と公衆衛生の実習では、現地の医学生にも大きな課題が課されていた。**Sibu** と呼ばれる地域に住居を構える先住民の方々の村全体に介入研究を行い、その結果をクラス全員で1つのレポートにまとめあげるといったものだった。テーマは”Food labeling”で、村人の食品表示に対する意識調査をし、健康状態との相関を調査するものであった。調査のために血圧や体重、身長を測定する機会もあったが、それだけではなく **Zumba** と呼ばれるダンスを通して村人と交流を図るなど、コミュニティとの関係を大切にしていることが見て取れた。

蚊の成虫を駆除する目的で行われる **Fogging** を見学する機会を得られた。蚊の媒介するデング熱などの予防の目的でその地域では月に 2 回ほど行われているようだ。日本では見たことのない光景で、**Fogging** を行っている最中は辺りが白い煙で覆われてしまう。

■ 成果および今後の抱負

今回の海外留学で地域医療と公衆衛生に参加させてもらった。病院実習とは異なり医学英語に触れる機会はそれほど多くはなかったが、マレーシアの医療情勢や、地域の人々との交流を通して文化的側面にも触れることができた。我が国ほど医療設備が充実しているとは言えない中で、多くの職種の人々が、地域に根差した医療を提供するためにそれぞれの役割を果たしていることを実感することができた。

医学生も英語で勉強する一方で、地域の人々と会話をするためにマレー語も流暢なため、2か国語、3か国語を喋る人がほとんどで、これからの英語学習に対するモチベーションも高まった。また、医学生積極的に授業に参加する姿勢や勉学に励む姿を目の当たりにしたことで、彼らに負けないようこれからも精進していこうと思った。

それから、海外留学して得られた新しい視点で、日本の医療を見つめ直し将来の進路やキャリアに繋げることが出来ればと思う。今後も海外留学の機会があれば積極的に活用していきたい。

■ 最後に

今回の海外実習に際して、ご支援いただいた岸本忠三先生、医学科教育センターの和佐先生、河盛先生、西川さん、教務係の柴田さん、UNIMAS の Dr. Tang、Dr. Ayu、Dr. Clifton、Mr. Paul、その他お世話になったすべての方々にこの場をお借りして感謝申し上げます。

平成 28 年度 岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

医学部医学科 5 年 M. N

〈スケジュール一覧〉

- 1/9-10 オリエンテーション
- 1/11 プトラジャヤクリニック訪問、見学
- 1/12 シンガイクリニック訪問、見学
- 1/13 結核クリニック訪問、見学
- 1/16 インドネシア国境検疫訪問、見学
- 1/17 サラワク州ヘルスオフィス訪問、見学
- 1/18-20 ディストリクトヘルスオフィスの活動に同行
- 1/23 セリアン病院訪問、見学
- 1/24-27 現地学生と共に授業に参加
- 1/30-2/3 旧正月のため授業はなく、レポート作成

〈活動目的〉

マレーシアで実際に発展途上国の医療に触れ、日本での医療との違いや問題点を理解し考察する。また、マラリアなど熱帯地方特有の疾病について理解し、現地での対策方法などを学ぶ。

〈内容〉

都市部と、都市部とは離れた田舎の両方のクリニックに実際に訪れ、そこでどのような医療が行われているかを学び、また役割の違いなどを学んだ。また結核を専門にみるクリニックで結核の対処を学んだ。

他には、マレーシアとインドネシアの国境にある CIQ を訪れ、そこでの業務を学んだ。ヘルスオフィスでは、その地域でいま問題の疾病についての会議に参加させていただいた。実際に現地学生が受けている授業にも参加させてもらうことができた。

〈成果〉

田舎のクリニックでは医師が一人しかおらず、また使える医療機器に大きな制限があり、そのうえでどのようにして医療を行っていくのかということは大変勉強になった。マレーシアではアシスタントドクターという職種が発達していて診察に関してはほとんど医者と同じようなことができる。医者の少ない地域では彼らなしでは成り立たないと言っても過言ではない。

また現地ではデング熱に対してかなり重点的な対策をとっていることがわかった。媒介者である蚊の調査などを勉強することができた。

大学の講義に参加して驚いたのは、現地の学生がみな講師に当てられたりしなくても質問に全員で答えていたことである。日本では学生はあまり発言しないので、この違いには驚いた。

〈現地での交流について〉

マレーシアでは、マレー系、中国系、インド系などの様々な民族がともに暮らしている。それぞれの民族は言語も宗教も違う。現地では学生寮に滞在させてもらったのでこのような様々な民族出身の学生たちと交流することができた。様々な民族が共に暮らしていくというのは日本に住む私達には大変難しいように思えるが、彼らはうまく溶け込んでいて、感銘を受けた。

〈今後の抱負〉

今回の留学で日本の医療がかなり恵まれた状態にあると感じ、また日本の医療制度が必ずしもベストではないということを感じた。例えば日本ではどこの病院に行っても平等に医療サービスを受けることができる。一方で日本では家庭医というのが少なく、大病院とクリニックの機能分担があいまいであるという問題がある。最も適した日本の医療制度について考えるために、様々な国の医療制度を学ぶ必要があると感じた。

また今回海外で医療を勉強したことにより、将来海外で臨床をしてみたいという思いも強くなった。そのために今後も継続して英語力を高めていきたい。

〈最後に〉

今回の留学では日本では経験できない貴重な体験をすることができました。

岸本先生には奨学金という形で援助して頂いたことに心から感謝申し上げます。